

解説 「運命」に導かれた「キャンドル大統領」

——文在寅政権の歴史的位相

権容爽

本書は当初、二〇一二年一二月の大統領選に向けて、文在寅の「出馬宣言」として刊行された。当時文在寅は、盧武鉉ノムヒョク元大統領の支持層からは絶大な信頼を得ていたが、全国的な知名度がそれほど高かったわけではない。人権弁護士出身の文在寅がなぜ大統領にならねばならないのか、生い立ちと盧武鉉との「同行」の人生を辿り国民に語りかけた。

本書は公刊二週間で、世界各国で翻訳された申京淑シンギョンスクの『母をお願い』（集英社文庫、安宇植アヌシク訳）をおさえ書籍部門の売上げ一位になった。二〇一二年八月の時点で七九刷二三万部に達し、一七年に改訂版、一八年には大統領就任一周年記念版も出版されている。

日本における音楽・食など韓国文化への関心は、二〇〇〇年代初めの「韓流ブーム」の後もいつそう高まり、浸透している。しかし韓国政治、ひいては韓国大統領はいまだ遠い存在だ。ネットで「韓国大統領」と検索すると、「末路」「逮捕」「不正」などネガティブな関連語が浮上する。だが、日本と関係の深い隣国の大統領を政治的存在としてだけでなく、一人の生身の人間として知ることは意味あることだと思う。

文大統領の波乱万丈の生涯は、それ自体が韓流映画のようでもある。北からの避難民出身で、貧困のなか人権弁護士となり、民主化運動に身を投じた「善き人」、そして「ふつうの人」が、試練と挫折を乗り越え